

剣と魔法が支配する世界、通称アルビオン。そこでは魔王軍との戦いに備えて、あらゆる街で冒険者を育てるためのギルドが存在していた。

剣を取り、物理で敵を倒す者。

魔法を覚え、奇術で敵を翻弄する者。

とはいえ、厳しい訓練ばかりをするのがギルドではない。モチベーションを上げるために、衣食住の手当はしっかり存在している。特に男にとっては性欲を満たすのは必須だ。

「お姉さん、今日も頼むよ！」

「あなた、昨日も来たね。紙に好みのタイプは書いた？」

「もちろん」

街の片隅では、毎日こんな会話が風俗店で交わされる。ただ、最近の流行りは時間制で何発かやるタイプとは違う。

「今日の夢の登場人物は王国の姫様だ」

「これはまた大それたやつ。本日、五人目」

サキュバスの店長はそう言って、ため息をついた。

ギルドの男達の大半が夢中になっているのは、デリバリーサキュバス、通称デリサバだ。

なにしろ淫夢を見せるサキュバスの性質上、自分好みの女の容姿を指定することもできる。そのへんの風俗嬢とするよりも安上がりで性感染症の心配もない。

そのため、この街では夜な夜なサキュバス達が冒険者の宿に向かうのが風物詩となっている。

「スカーレット、そろそろ時間だよ！」

「はあい」

待機所にいると名前を店長に呼ばれて、私は紙を受け取った。

この私、リストリア・スカーレットもその内の一人だ。この店に勤めるサキュバスは昼にあらかじめ指定の紙を受け取って、夜に冒険者の宿に行くことになっている。

夢を見せるために男のそばに行くのが面倒だが、金も精液も同時に得られるんだから上手い商売だ。

「さて、今日の客はと。希望は王国の姫様か」

宿の名前をチェックして急いで向かう。

これを見るに注文した男は新規の客らしい。噂を聞いて別の街から来る冒険者もいるのだから、別にめずらしくはない。

「ちゃんとルールを守ってくればいいけど」

宿に着いて扉を開ける前に手鏡で化粧をチェックする。

朱の混じった黒髪と我ながら目鼻立ちの整った顔。白い肌に巨乳を強調した赤のドレスといい、我ながら男を悩殺するには申し分ない。

ともかく、今日も稼がせていただきますしょう。

「こんばんは一。デリサバのスカーレットです」

そう言って扉をノックすると、すぐに開いて筋肉質の痩せた男が出てきた。大体、剣を使う冒険者は筋肉質で、そうでない時は魔法使いだ。

男は私を上から下まで見るなり、性欲むき出しの下卑た笑みを浮かべた。

「やぁ、待っていたよ！ どうぞ入ってくれ！」

「あなたが今夜の客ね」

そのまま私を奥へと迎え入れる。といっても、ただの宿なんだからベッドくらいしかそこにはない。それもツインの……ツイン？

「わかってると思うけど、本番行為はないわよ」

「あれ、そうだったかな」

「当たり前よ。サキュバスなんだから」

そう言って振り向くと、男は扉に鍵をかけていた。さらにチェーンも。

「ちょっと待って。何するつもり？」

「あんたみたいな女を夢だけで済ませるのはもったいねえなって」

「はあ？ 姫様が好みなんじゃないの？」

「気が変わったんだよ。あんたがいい」

彼はせせら笑うと、上の服を脱いだ。分厚い胸板や腹筋が見えるやいなや、鼻息荒く私に迫ってくる。

全く……これだから新規の客を相手にするのは厄介なんだ。

『『ねむれ』』

「うお？」

手をかけられるよりも早く、そう呟いて男の目を見た。途端に彼は姿勢のバランスを崩すと床に手をついた。

「……これは睡眠魔法か」

「あんたみたいなやつがたまにいるのよね。力で優ってるからって、現実で犯そうとしてくるやつ。どこの流れ者か知らないけど、街から出て行ってもうらわよ」

「いやいや、さすが。強い女は嫌いじゃないぜ」

それでも減らず口を叩く男に、私はしゃがみこんで顔を上げさせた。もう一度、睡眠魔法を浴びせて昏睡してもらう。それで次に起きた時は身ぐるみ剥がされてるというわけだ。

『『ねむ——』』

「そこまでだ」

その時、別の男の声が聞こえた。はっとして振り返ると、ベッドの下から男が飛び出している！ 予想外の登場に一瞬、私も反応するのが遅れた。

「捕まえたぞ！」

「きゃあ！」

魔法を言うより先に彼は私の背後に回るなり、体を羽交い絞めにしてきた。

「痛い！ やめて！」

「こっちだって、そんな簡単にやれると思ってねえよ。なあ？」

そう言うと、さらにもう一人ベッドの下から男が現れた。